

# 自然と農業を観光資源として活用した新しいまちづくり

## 1.はじめに

21 世紀における地域振興の基幹産業の一つとして、最近観光産業に対する期待が高まっている。九州は、四季に彩られた自然や史跡、澄んだ空気や温泉、新鮮な食材など、豊富な観光資源を有している。その一方、各地域における観光地の現状は、これらの優れた観光資源を有効活用しているとは言い難く、これまでの「観光地づくり」とは異なった視点での観光振興（まちづくり）に取り組むことが必要と考える。

前述した背景を踏まえ、ここでは、持続可能な「観光地づくり」と「まちづくり」を一体化した観光振興のあり方について考察する。考察に当たっては、具体的な地域をケーススタディーとして示すのが分かりやすい。対象地域は、①筆者らがその地域をある程度熟知していること、②その地域が、例えば市町村合併などにより、まさにまちづくりを推進しようとしていること、等を基本条件とし、観光資源が豊富である甘木市周辺地域（甘木市、朝倉町、杷木町：H18 年 3 月合併）とした。

## 2.観光に対する意識の変化

近年、健康志向・環境意識に対するライフスタイルの変化は、のんびりリラックスしたニーズや、自然や農業との触れ合い、ゆとり、安らぎなど、精神的な豊かさを重視するといった価値観が芽生えている。筆者らも平日は、福岡の中心市街地で仕事をしているため、休日は市街地に出たいとはあまり思わない。むしろ、都会では得られない豊かな自然や美しい景観に親しめる場所を求める。実際、都市部に住む多くの人たちは、都市の喧騒とした景色に疲れており、農村回帰といった昔懐かしい原風景に心の安らぎや潤いを感じる。

他方、農村地域においては、人口減少、高齢化の進展により、地域の活力が低下しつつあり、かつて、その地域が守ってきた生活、伝統的文化など、特色豊かな活動が希薄化し、農村の風景そのものの魅力が失われる結果、観光資源の消失につながっていることも否めない。すなわち、魅力ある観光地とは、活力ある「まち」そのものと捉えることができる。

このようなことから、これからの地方の観光振興とは、現状の観光資源を劣化させず、かつ多様化したニーズに対応できる観光資源を育てていくことが必要であり、この点で、「まちづくり」と「観光地づくり」を一体的に行うことが重要と考える。



**写真-1 三連水車**

### 3. 新生朝倉市における現状

平成 18 年 3 月 20 日に甘木市、朝倉町、杷木町の 1 市 2 町が合併し朝倉市になる。これを契機に、豊富な観光資源と交通の利便性を活かし、「まち」の活性化として、観光振興という視点から新しいまちづくりを推進することを提案したい。当地域の現状における特徴は次のとおりである。

#### <自然環境>

当地域は、図-1 に示すように、季節を自然に感じることでできる所が数多くある。春はさくら、梅雨は菖蒲、ほたる、夏はひまわり、秋はフルーツ狩りである。また、ダムも3ヶ所保有し、福岡都市圏の水がめの役割を果たしている。自然が保たれているため、この自然を観光資源として活用すれば、効果的である。



図-1 現況の観光資源図

#### <交通>

交通のアクセスは非常に良い。近くに物流の拠点である鳥栖があるため、高速道路も九州自動車道、大分自動車道、長崎自動車道が結節している。図-2 に示すように、高速道路を利用すれば、福岡市内からは35分程度、北部九州（福岡、熊本、長崎、佐賀、大分）では120分以内で到達できる。加えて、当地域内には、甘木 IC、朝倉 IC、杷木 IC の

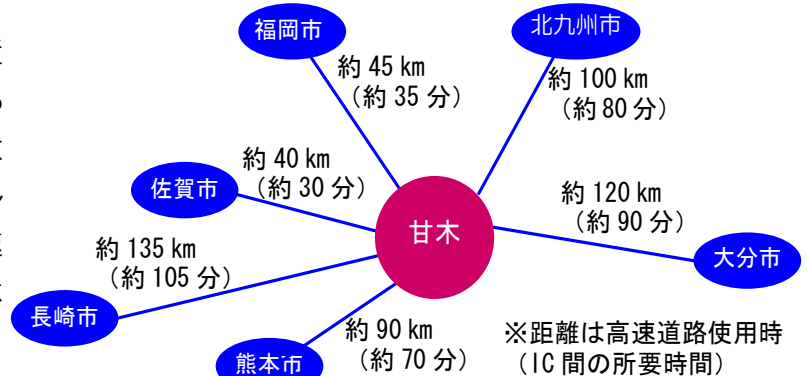


図-2 主要都市間のアクセス

3つのICがあり、自動車交通の環境が整っている。また、福岡市内からのアクセスが良いため、遠方からの来訪者は飛行機、新幹線を経由することも可能である。

#### <観光>

観光資源は、甘木市の秋月城址に代表される史跡と福岡県内有数の温泉郷である原鶴温泉が有名で、杷木町の筑後川鶴飼い、朝倉町の三連水車が有名である。ただし宿泊施設は、当地域の観光資源の特性から多くはなく、滞在型の観光は望みにくい。これらの観光資源と原鶴温泉の連携を図ることにより、これまでと違った観光形態を創出するのが課題である。



写真-2 恵蘇八幡宮の鳥居

## <産業>

主力産業は農業であり、博多万能ねぎの生産量は日本一であり、志波柿はブランド農産物として有名である。また県内では、柿、ぶどう、なしの生産地として有名であり、秋の行楽シーズンのフルーツ狩りも盛んであり、これら農産物をより有効な観光資源として利用する工夫が必要である。

## 4.持続可能な観光地づくりによる活力あるまちづくり

### ----- 既存の観光資源を有効活用するための観光プランの提案 -----

ここで提案する新しいまちづくりとは、利便性の高い交通アクセスを効果的に利用した上で豊かな自然と景観に農業を結びつけた、観光形態を創出することである。

現有する（観光）資源を整理すると、戦略的に利用可能な資源がいくつかあることが分かる。

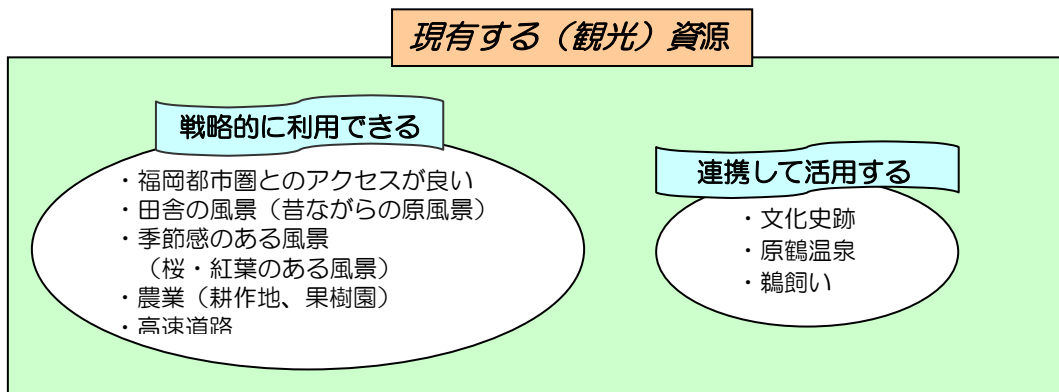


図-3 現有観光資源

以下にこれらの観光資源を効果的に活用した観光プランを提案する。

### ① 農業交流による滞在型観光の創出

これは主力産業である農業に着目したまちづくりであり、農業の活性化と、景観の保全が重要なポイントとなる。秋の頃は、高速道路を走行中に眺めることのできる杷木の柿畑は非常にきれいであり美しい景観の1つである。しかし、それを維持する人は年々高齢化していると考えられ、維持することが困難な状況になっているのではないかとと思われる。

このようなことから、農地の利活用促進、景観保護、人的交流の促進をはかることを目的として、農業体験を1つの観光資源として利用し、例えば、果物の収穫時期に長期滞在型の農業体験プランを構築する。長期滞在用の宿泊施設は、農家にホームステイすることが可能であれば、新たな宿泊施設の設置は不要である。また、当地域には原鶴温泉があるため、温泉施設の利活用が可能であれば経済効果も期待できる。

このような滞在型の農業体験プランは、今後劣化するであろう農村の原風景（景観）の保存策としても有効であり、最近注目されている「美しい景観」づくりにも寄与するものとする。

<これにより期待できる効果>

- ・地域の活性化
- ・農地の利活用促進
- ・農業体験を核とした交流
- ・景観の保全

## ② 観光資源の連携による日帰り観光

当地域の観光資源の特性を活かして、日帰り観光客の増大を図る。季節の味覚が満喫できるフルーツ狩りを観光資源と捉え、三連水車等の観光スポットとの連携による観光ルートを創設する。多様化した観光嗜好に対応するため、家族あるいはグループ等の少人数単位の観光客をターゲットとし、複数のフルーツ狩りを1日まわり放題としたフリーパスを発行し、季節の味覚や風景が堪能できる周遊コースを計画する。

当地域の観光客の多くは、利便性のよい自家用車を利用すると考えられるため、季節によっては周辺道路の渋滞問題が考えられる。したがって、落ち着いた雰囲気確保のために、観光客の地域内の移動手段とし、周遊バスを走らせれば効果的である。また、IC付近等の主要集客ポイントに駐車スペース（郊外型店舗の駐車場や河川敷や使用していない土地等）を確保すれば、観光客の増加による新たな渋滞はほとんど発生しないと考えられ、地域の日常生活にもあまり影響を与えない。さらに、甘木鉄道と西鉄甘木線への集客力を高める工夫をすれば、ゆったりとした列車の旅をあわせて楽しんでもらうことも可能である。

<これにより期待できる効果>

- ・なし、巨峰、柿等のフルーツのブランド化
- ・観光資源の連携強化
- ・地域内の観光客の増加

## ③ トランジット観光による立寄り観光

当地域の多彩な季節感に着目し、春は桜、秋は紅葉と季節感のある風景を観光資源としたまちづくりを進める。風景の鑑賞やフルーツ狩りを目的とした観光客は、一般に、半日程度の滞在で十分であり、交通利便性の良さも手伝って宿泊客の増加は望めない。逆にこれを生かして、「ちょっとした休憩」程度で立寄れる観光メニューを創出する。一例として、海外旅行の際に、乗り継ぎ「トランジット」をしながら目的地に行くことがあるが、高速道路でも当地域でトランジットしてもらう「トランジット観光」を促進する。

「トランジット観光」とは、乗り継ぎ程度の短時間（2～3時間程度）の立寄り観光である。高速道路で「トランジットパス」を発行し高速道路の途中下車を可能とする。その特典は、途中下車なので、再度高速に乗って目的地に行った場合の高速料金は、途中下車せずに目的地まで行く場合と同じでよいことと、途中下車で得た精神的なゆとりである。

高速道路の休憩場所と言えばSAやPAであるが、「ゆったりと景色が楽しめる場所」で休憩できれば旅行もより楽しめる。今の高速道路では途中下車はできないため、当地域は、目的地までの通過地でしかない。しかし、これらの観光客の一部を確保することができれば観光客の増大させることが

できる。また、付近を通る高速バスの利用者も途中下車できるようにする。高速道路のバス停に周遊バスを巡回させることで、観光施設へのアクセスの問題はない。さらに、道の駅、川の駅、山の駅、町の駅との連携を強化することにより、観光ツアーの時間調整の場所としての利用も可能であり、観光ツアー客の確保にも期待が持てる。

「ちょっとした休憩」には、このような利用方法も考えられる。

春の頃ならば、旅行途中にちょっと桜の木の下で休憩する。

夏の頃ならば、筑後川のほとりで涼んで休憩をする。

秋の頃ならば、巨峰や柿狩りをして、のんびりと秋を満喫する。

冬の頃ならば、原鶴温泉に立寄り、温泉でゆったり休憩する。

<これにより期待できる効果>

- ・立寄り観光客の増加
- ・高速道路の新たな利用法
- ・観光ツアーの新たなルートを創設

## 5.おわりに

新しい箱物の観光施設を作る場合は、新しい企画を更新しないとリピーターは望めないため、投資費用がかかり持続性が低い。しかし、当地域の観光資源は、多くの自然やフルーツ狩り、農業体験に利用する農地は、現有する資源であり大きな投資は不要である。観光資源の広域的な連携と、フリーパスやトランジットパス等のソフト対策を行うことで、今までにない観光地としての魅力を引き出すことができる。

ここでは、甘木市周辺地域をケーススタディーとして、観光振興におけるまちづくりについて考察したが、九州には、同様に多くの資源が埋もれている。地域特性はあるものの、適切なソフト対策を実施することにより観光地としての魅力向上が図れると考えられる。

プラン実施においては、その魅力をいかに多くの観光客に広報するかも重要である。現在は、インターネットが発達しており、手軽に情報が収集できるツールとして一般に認識されている。これらの広報ツールをうまく利活用することも重要である。

最後に、ここで提案したプランの実施にあたっては、「観光まちづくり」という観点から、行政と地域住民が一体となって、協働で進めることが不可欠である。加えて、長期的視点に立ち、計画・実施したプランを継続的にチェックし、不足する部分や問題点、ニーズ変化に対応して更新するPDCAのサイクルを取り入れることが重要と考える。